

Origami Tanteidan Newsletter

折紙探偵団新聞

53号

急募

TVチャンピオン
出場者

第五回「空間作品」その1

<ちょっと趣味の世界です>

今回からは、筆者が最近熱中し、かつ思索している表現方法である「空間作品」についての話題である。まずはじめに、そもそも筆者が空間作品と呼んでいるものはどのような特徴をもっ

た作品であるのかということについて、作品例を挙げて述べてみたい。もちろんこうした分類は流動的・境界が曖昧なものであり、ひとつの作品の中に部分的に存在したりすることもあるということは言うまでもない。

<これって空間作品？>

笠原邦彦氏の「半開折り」作品群の中には、筆者の好みの雰囲気をもっていて、勝手に「これは空間作品なのではないか？」と思っているものがいくつかあるが、孔雀観音もそのひとつである。この作品については羽鳥公士郎氏の「折紙の哲学」でこれから取り上げられる予定であると聞いているが、私もここで少々書いてみたい。

笠原氏は「小口（こぐち）からという新しい視点」の話題を中心として、半開造形の形状に於ける魅力を語っておられるが、筆者はこうした作品に対して、また違った角度からの価値を感じる。すなわち「今にも逃げ去りそうな、こぼれてしまいそうな空間を必死に捕らえている、もしくは作品表面に空間を漂わせる、まどわりつかせる」という印象である（…って、抽象的なことを言ってるんだかさっぱり伝わってないかも）。言い換えれば、「周囲の空間と一体になって、もしくは空間自体を重要な構成部品として作品が成立している」ということである（…まだよくわからん）。

孔雀観音に於ける空間と紙との相互作用には不思議な心地よさを感じる。

光背の階段状・錐状の面構成は、空間を保持する重要な構造である。さらに人物部分が適度な大きさで存在することによって、光背との間にはさまれた新たな形状の空間のかたまりが認識される。積極的に「ひろげる」という作業により、折り紙という方法から空間的な形状が自然に、魅力的に導き出される。全体が完

全に平面の作品や、既存の概念での「立体作品」など、これまでに存在した造形にはあまりみられなかった空間のとらえかた、軽さを感じさせる。

さらに、折りたたんだ部分をひろげるという行為は、用紙と折り目の張力のバランスにより、必然的に曲面を生み出す。階段状にひろがった光背は決して、平面によって構成されているのではない。微妙な曲面であることをつよく意識させる仕上がりとなり、こうした部分に空間がまどわりつく。喜多方ラーメンのちぢれにまどわりつくスープのように。完全な平面には、この効果はあまり期待できない。孔雀観音の形状を、厚いアクリル板など平面をつよく意識させる材料を切り貼りすることによってつくったとしても、まったく異なった雰囲気になるはず。折り紙という方法でこそ可能な、折り紙という方法でこそ魅力を発揮する造形のひとつと言えるだろう。（それだけに、この作品に対する評価はこれまでになく難しく、ひとによってさまざまになるということでもある。）

作品のなるべく多くの部分をこうした曲面で構成することによって、味のある空間が表現できる。自然なたわみなども、無理にキッチリに直さなくていい。平面がゆるい曲面になるだけで、その形状のもつ視覚的情報量が激しく増大してさまざまなイメージを内包し始める…ような印象を筆者は受ける。パソコンで折り図をひいてみるとよくわかることだが、完成図の構成線をほんのわずかに曲線にしてやることによって、どれほど心地

よい図形へと変貌することか!! さらにこれら「曲面」と上記の「面構成」との相互作用により、その空間保持効果が何倍にも増強されるのはいうまでもない。

川崎敏和氏の「バラ」は、まったく直線折りだけの工程から、しなやかな曲面に囲まれた空間が生みだされる。完全に密閉されてはおらず、適度に空気が…空間が流れ込むことのできる解放系を構成するのである。それぞれの曲面パーツが、もともとは平面の用紙であった、ということもこの風通しの良さの要因であるかもしれない。曲面が生々しくならず、乾燥し風化したイメージを漂わせる。平面と曲面とを同時に意識させる花弁。

目黒俊幸氏の「うに」の本領は、ある程度多くのカドを引き出したときに発揮される。トゲトゲの密度が不思議な適度さをもって自然な球面状に散らばり、空間をとらえるかたちで生じるのだ。「厚み」も重要な作品構成要素になっているという点では上記2作品とは少々趣を異にするが、これもつよく「空間」の存在を感じさせる造形だと思う。裏側のでこぼこドーム状の空間もまた新鮮な魅力にあふれている。「うに」に見立てずにオリジナル造形としても通用すると個人的には思っているのだが。

今回は作例を挙げるだけでおわりにしてしまったが、今回はこれらの特徴をいかにして作品に盛り込みまとめ上げるか、という本題について筆者の取り組みかたを述べる予定である。（つづく）

折り紙
という
方法 北條高史



とこが折紙時評やねん

前川 淳

まえかわ じゅん Jun Maekawa

■前回の「本」は、高木智さんの指摘により、竹川清良さんの創作らしいことがわかりました。

第13回
折り紙好きは
ここに住もう

ある日届いた一通の手紙。差し出し人の住所はホワイトハウス。むむ。しかし、「ガツンと言ってくれ」という手紙ではなかった。単にアパートの名前がホワイトハウスなのである。大胆な命名に呆れる半面、アメリカに手紙を書く際、住所だけで笑いが取れることをうらやましく思った次第である。グランコーポ・メゾンブルニエとか、カーサハイム・モズノハヤニエとか、日本の集合住宅の名前には、カタカナ語を使った長いものが多い。かく言うわたしの住む家も「調布の森ハイム」だ。イッヒハーベン アイン ハイムてなもんで、すっかりドイツ人の気分である(ウソ)。とまあ、住所だけでウケを取ろうというのも、われながらバカげた発想ではあるが、今回は、折り紙愛好家が住むのに一番相応しい地名・住所はどこかについてである。

まずは、埼玉県鶴ヶ島市羽折町。略して鶴ヶ羽折。さらに略して鶴折。ひっくり返して折鶴。3工程で折鶴が完成する地名である。



埼玉県鶴ヶ島市羽折町

地図に描かれた市町村境界の二点鎖線が山折り線に見える土地柄だ。さる秋の日、実際にその鶴ヶ島市を訪問した。以下は、その報告である。

まず最初に立ち寄ったのは市立図書館。そこには、「桑名の千羽鶴」(大塚由良美著)が3冊もあった。「これはなにかある!」と、期待を持って次なる目的地・鶴ヶ島市役所へ向かったのだが、結論を言うと、「桑名の千羽鶴」については詳細は不明のままであり、折鶴に関しての目ぼしい収穫もなかった。市の関係する折り紙教室もないとのことである。

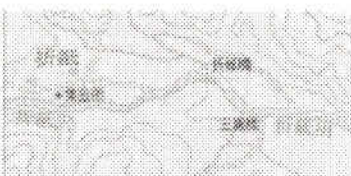
ただ、突然訪れて、悪魔の絵のついた世にも怪しい名刺を出した変なやつの変な質問にもきちんと答えてくれた鶴ヶ島市役所の職員は実に偉い。あるパンフレットの表紙の写真にあった「謎の折鶴状物体」(川越市との境にある川鶴団地の街灯と判明した)の調査には、三人もの職員が時間を割いてくれた。図書館も立派で、経企庁の豊かさ指標(埼玉県は最下位)とは逆に、住みよさそうなどころである。

羽折町という地名の由来に関してだが、これもいまのところ不明である。市の中心部にある龍神伝説を起源に持つらしい脚折(すねおり)と、隣接する坂戸市の浅羽からそれぞれ一文字を取ってつけたものと推測できる。

その肝心の鶴ヶ島市羽折町は、果たしてどんなところか?そこは…、なんの変哲もない住宅地だった。なんの変哲もないのは当然と言えば当然である。軒先に千羽鶴が下がった家がずらりと並んでいるとも思っていたのか? そんな折鶴マニアの妄想をよそに、夕闇せまる羽折公園では、若い母親が子供を遊ばせていた。実に平和な光景である。帰り道、市の中心部から離れた国道407号線沿いでは「千羽」というホテルの看板が少しくすんだ光を放っていた。

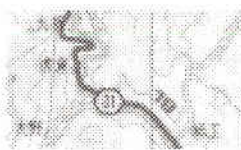


折り紙関連地名と言え、そのものずばり「折紙」なる土地があることが知られている。山口真氏が偶然通り掛かったことでわれわれ



青森県南津軽郡大鰐町居士折紙
折紙川に折紙橋が架っている。
集会所もある。

れも知るところとなった青森県南津軽郡大鰐町居士折紙と、もうひとつ、長崎県福江市藤町折紙である。いずれも詳細や由来は不明だが、西と北に離れている点が、「文化の同心円伝播説」を連想させる。同所の近くには、それぞれ、折紙山と折紙鼻がある。古代折り紙文化が伝播して西と北の端に達したとの仮説が考えられるであろう…なんてことあるわけではない。



岡山県御津郡御津町紙工
九折という地名も見える。

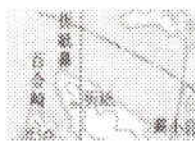
どんな通なんだからわからないが。そして、鶴のつく地名。これは多い。

実は、鶴ヶ島市を訪問した約1週間前、わたしは山梨県都留(つる)市を訪れている。(わたしは決して閑を持て余しているわけではない)都留市では、都留高校(正確な所在地は隣市の大月市)の校章が折鶴であり、「ツルタクシー」の営業車が折鶴マークを使っていることを確認した。

ということで、石川県の鶴来温泉や秋田県の鶴ノ湯温泉なども、たぶん近いうちに訪問してしまいそうな気がするわたしなのであった。

以上のような話を西川誠司氏にしたところ、「推理小説で、被害者の生前の足跡を追う話があるけれど、このケースは、小説に出てきてもリアリティーがないなあ」と言われてしまった。

鹿児島県鶴田町と青森県鶴田町をうろついていた男。男はその1週間前には富山県八尾町谷折峠にいた。果たして男の目的は? たしかにまぬけだ。



長崎県福江市藤町折紙
(五島列島・久賀島)
二点鎖線は山折り線
じゃないよ。

岡村昌夫

第35回

おりがみ庵

ひとりごと



おかむら まさお Masao Okamura

■来年は期待のイベントいろいろ。楽しく準備中です。乞ご期待。

【やっこさん】

代表的伝承折り紙の「ヤッコ」が明治時代に何と呼ばれていたかという資料を次に列挙する。江戸時代に「こも僧」だったことは、明らかにされている。もとは縦に二つ折りにしたものであったが、すでに明治には現在の「やっこさん」と同じ形になっている。「虚無」と書いても江戸時代には「こも」と読んでいたが、明治には「こむ」になっていた。

「虚無僧」とするもの

明治27年1月【(石川県)尋常小学校手工科実施方案】

37年3月【小学校に於ける

手工の実際】山下義正

38年8月【手工科教本】上原六四郎、木内菊次郎

40年6月【漢文手工教科書】

阿部七五三吉他

「ふくらすずめ」とするもの

18年8月【幼稚園初歩】

飯島半十郎

「人形」とするもの

24年5月【手工教授法】

浅尾重敏

「雀踊り」とするもの

27年11月【小国民】第6年

第21号

「襦袢」とするもの

39年【手技図形】

女高師附属幼稚園

「弥之助」とするもの

41年5月【手工科教授細目】

京都市小学校長会

「奴風」とするもの

34年10月【手工教授細目】

高師附属小学校

38年7月【手工科教授書】

棚橋源太郎、岡山秀吉

39年【手工科教授細案】

棚橋源太郎、岡山秀吉

40年7月【手工科教授細目】

長野師範附属小学校

43年5月【手工科教授細目】
熊本県教育会(「コム僧」併記)
「奴」とするもの

40年9月【普通手工提要】

阿部七五三吉

41年4月【手工科教授法】

岡山秀吉(「奴風・コム僧」併記)

41年5月【折紙と図画】

木内菊次郎(「虚無僧」併記)

41年9月【手工叢書 折紙図説】

佐野正造

41年【毎時配当手工科教授実際

案 附理論】京手工館

【奴に見立てた少年】

虚無僧が三角の笠をかぶらなくなって久しく、分かりやすい「見立て」がいろいろ工夫されていた。

左の「弥之助」とは昭和の『紙工芸大事典』に出ている「豆蔵さん」と同じく「ヤジロベエ」のことである。

中で注目すべきは「雀踊り」である。これは江戸中期から流行していた踊りで、大勢が二つ折りの編み笠をかぶって奴姿で踊ったのだそうだが、現代でもごく稀に歌舞伎の舞台上で窺い観ることが出来る。「五斗の三番叟」という芝居の幕あきに、大勢の奴が雀踊りの「見立て」で立ち回りを見せるのである。つまり忍んで来た亀井六郎を捕えようとする場面を舞踊化するに当たって、奴に編み笠をかぶせて洒落として雀踊りを使ったわけだ。「アリヤセ、コリヤセ、アリヤリヤンリヤンリヤンリヤン」という囃子ことばの合間に太鼓をゆつくりと打ち込んでゆく。両袖を開いたり閉じたりする振りが雀の郡舞を思わせる。

舌切りすずめの話の中で雀を奴姿にして踊らせるという絵を天保ごろに国芳が描いているが、同じ趣向で幸堂得知も戯作を書いている。彼は後に新案折り紙「こうもり」を名入り

で発表することになる。創作折り紙史上忘れられない明治人であるが、彼が明治27年6月の雑誌『小国民』に書いた「赤本の洗濯」(代表的な子ども向けの本の仕立て直しの意だろう)の中に挿絵入りで出ている。桃太郎やカチカチ山や舌切り雀などの筋をないまぜて、最後に桃太郎たちの前で雀の一群がめでたく雀踊りを踊るのである。多分この挿絵を見たのだろう、同誌に読者の少年が「やっこさん」を「雀踊り」の題で投書したのだ。しかし、この少年は雀踊りを雀が踊るものと単純に解釈して、笠の下に雀の顔を描いてしまった。

後に「奴風」に見立てたのは、高等師範の岡山秀吉で、その高弟の阿部七五三吉が多分「袴」と組み合わせる必要から風ではない「奴」に見立て替えをして、それが一世を風靡することになるのだが、実質的に「奴姿」に見立てたのは、「雀踊り」として投書した少年だったと言えよう。その少年の名は残念ながら特定出来ない。堤灯や二そう船などと組み合わせで「七変化」の題で、投書者として9人もの名が列記されているからである。

【二そう船は2種類あった】

前回に、西洋の「ダブル・ボート」と日本にもあった「二そう船」が同じものというふうを書いてしまったが、不正確だった。「ダブル・ボート」は現在の普通の「二そう船」であるが、これとは別に「豚」に近い「二そう船」もあって、明治の資料には両方見えている。『和漢船用集』に出ているのは「豚」に近い方である。これはまた別に書きたい。



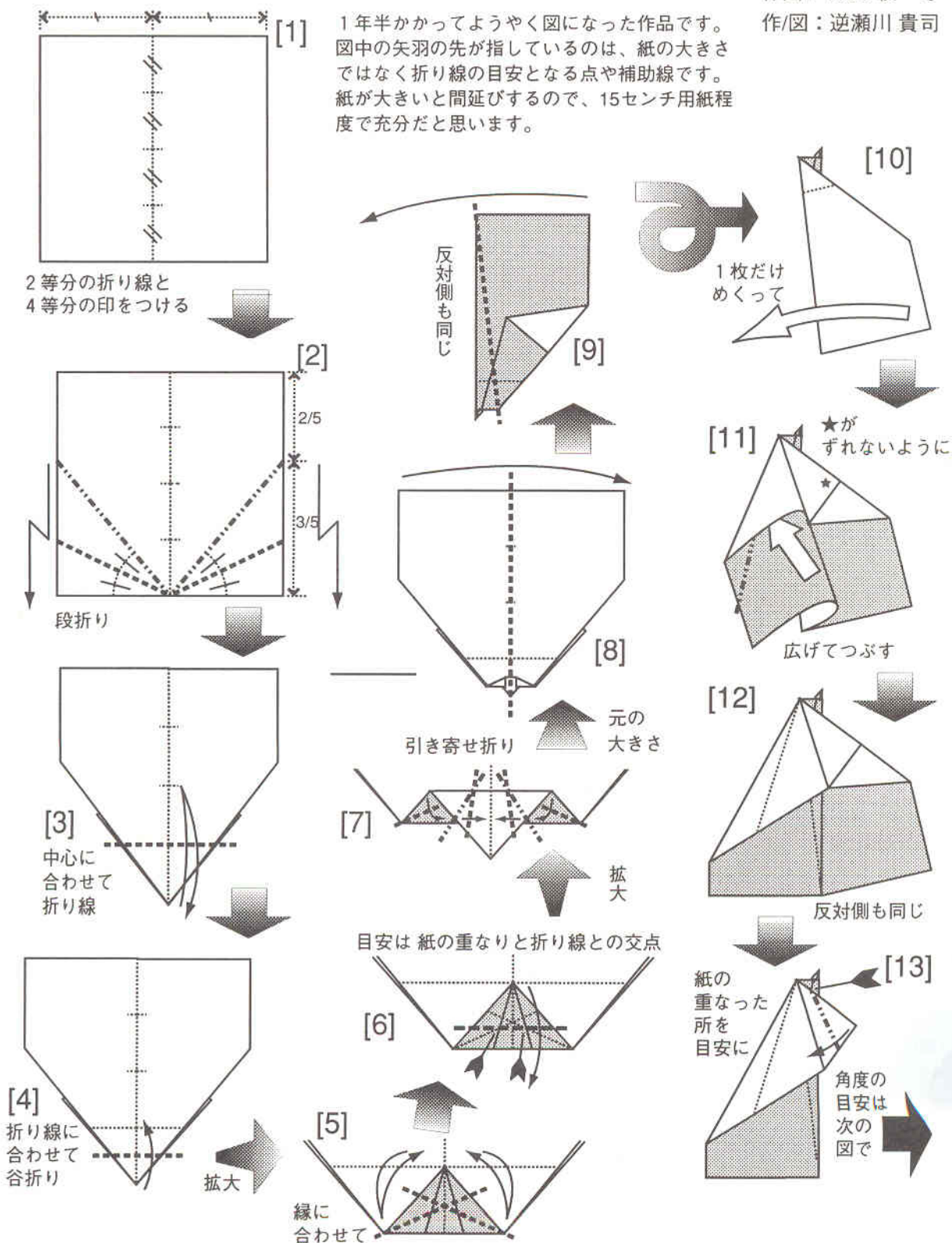
PARAGLIDER パラ グライダー

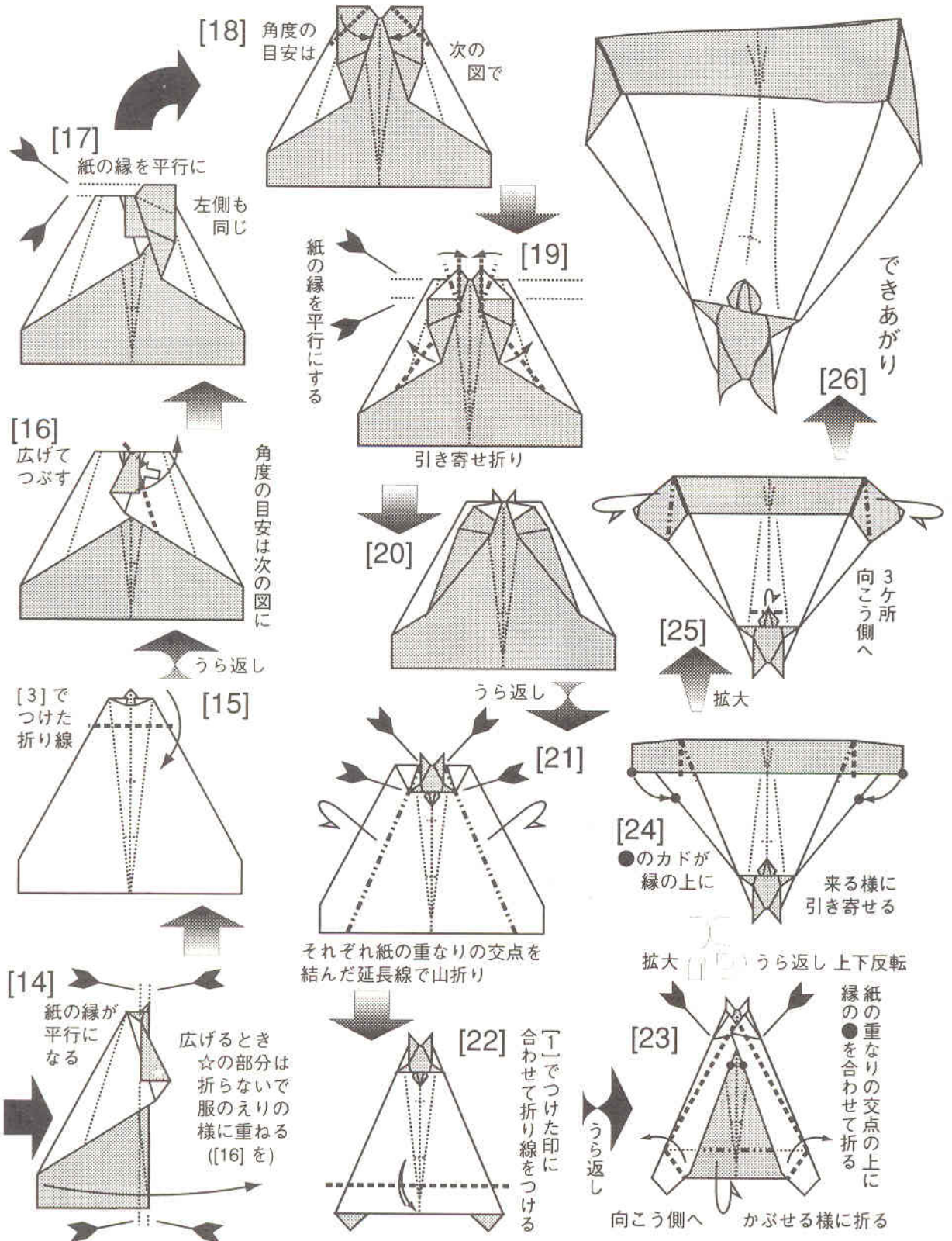
創作：1996 秋～冬

作図：1998 秋～冬

作/図：逆瀬川 貴司

1年半かかってようやく図になった作品です。
図中の矢羽の先が指しているのは、紙の大きさ
ではなく折り線の目安となる点や補助線です。
紙が大きいと間延びするので、15センチ用紙程
度で充分だと思います。





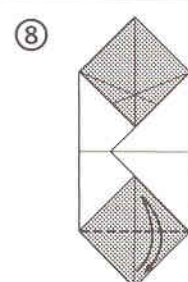
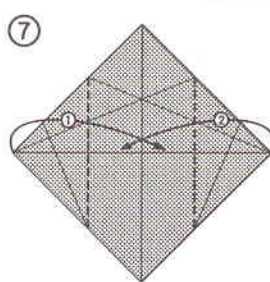
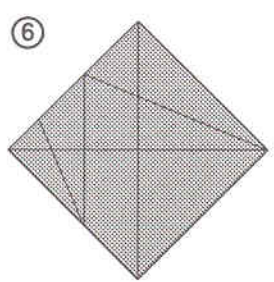
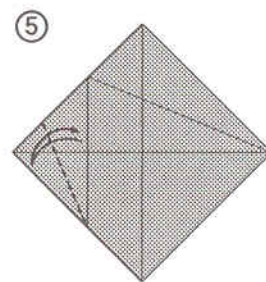
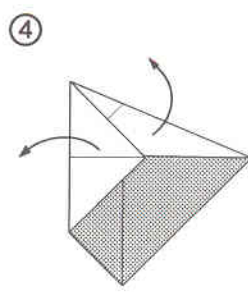
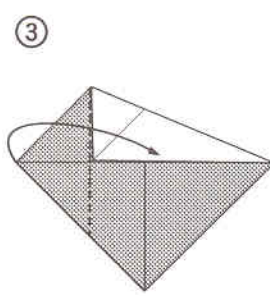
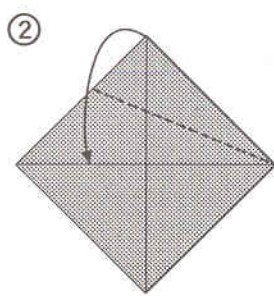
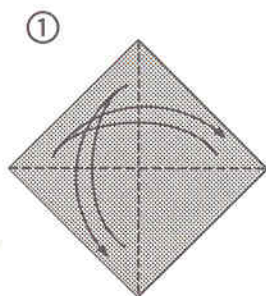
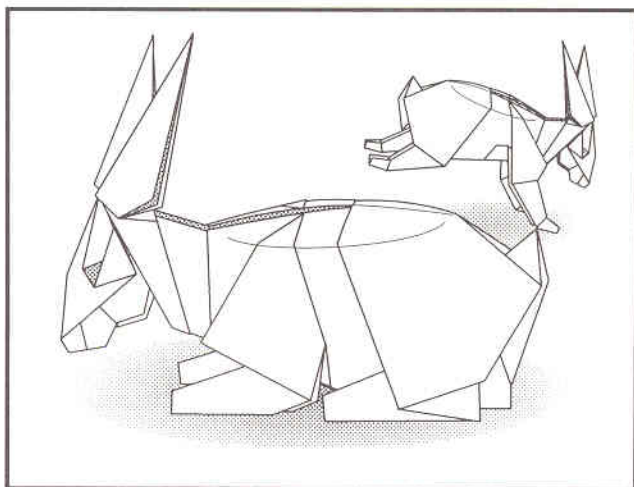
うさぎ

作 / 図 宮島 登

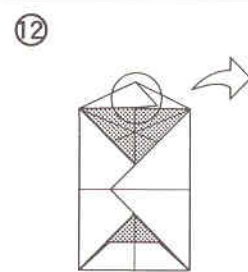
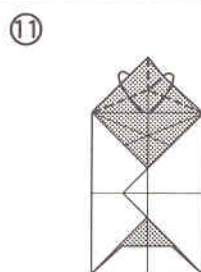
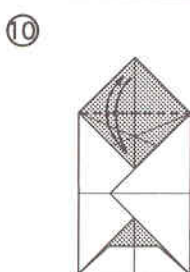
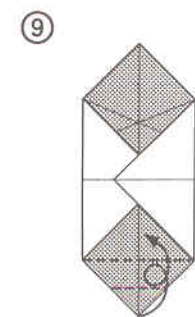
創作 97 年 10 月

作図 98 年 11 月

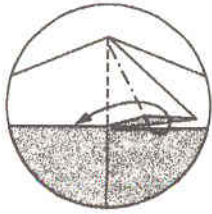
説明するまでもなく来年の干支です。リアリズムを追求した結果、「かわいさ」のかけらもなくなってしまった珍品です。「うさぎ」だと思って甘く見ずに、24 cm 以上の大きめの紙で折ってください。



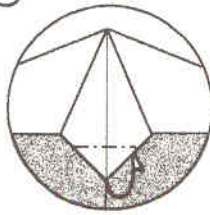
右側も同様に折る
(②~⑤)



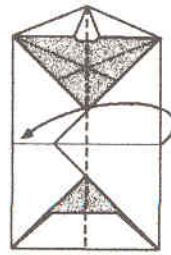
⑬



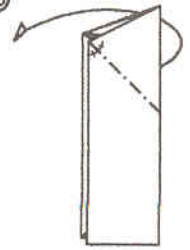
⑭



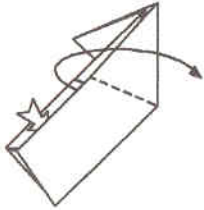
⑮



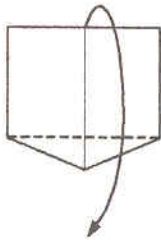
⑯



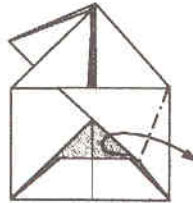
⑰



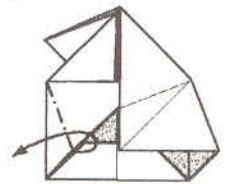
⑱



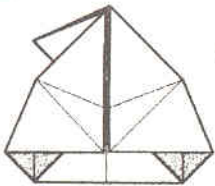
⑲



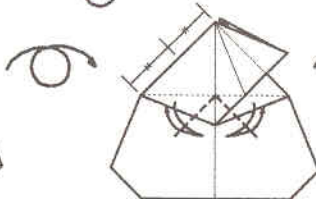
⑳



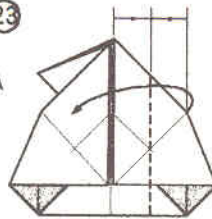
㉑



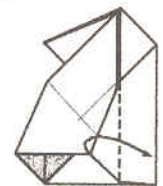
㉒



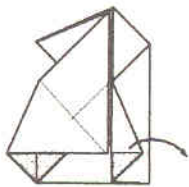
㉓



㉔

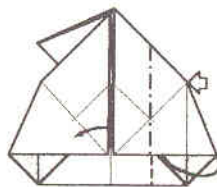


㉕

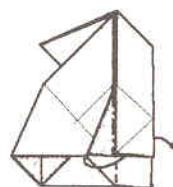


もとに戻す

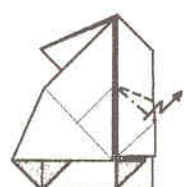
㉖



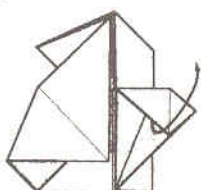
㉗



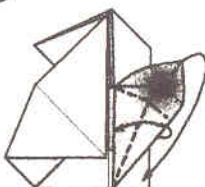
㉘



㉙



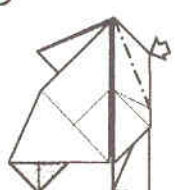
㉚



㉛

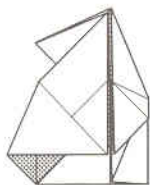


㉜



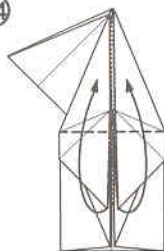
しずめ折り (Closed Sink)

33

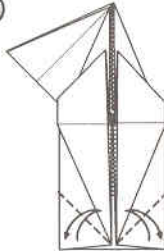


左側も同様に折る
(23~22)

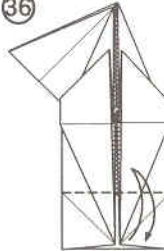
34



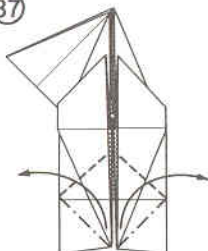
35



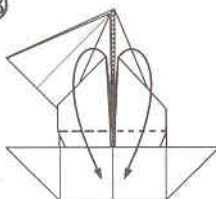
36



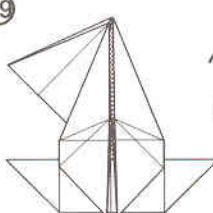
37



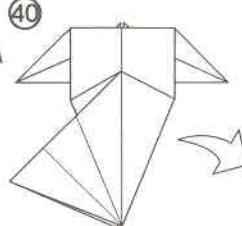
38



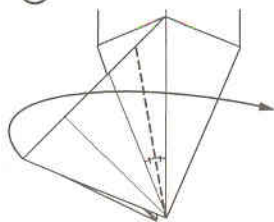
39



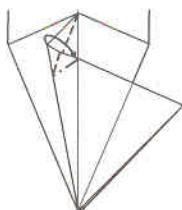
40



41



42

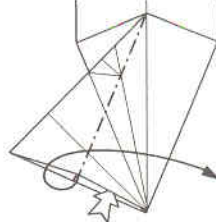


43

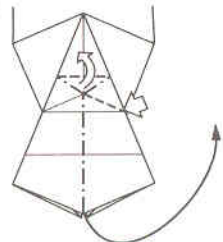


もとに戻す

44

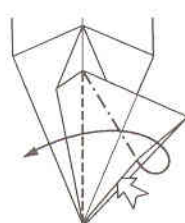


45

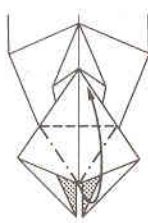


頂点を上方に引っ張り上げるように、鶴の基本形の要領でまとめる

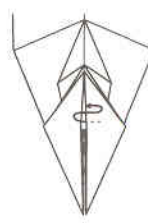
46



47

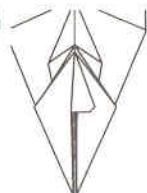


48



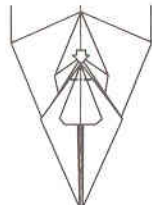
内側の紙を表に出す

49



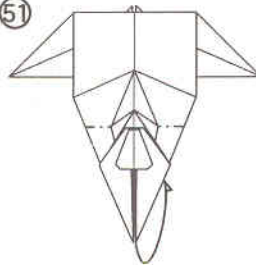
左側も同様

50

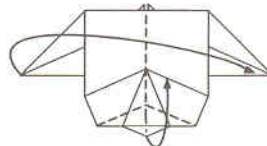


先端をしずめ折り
(Open Sink)

51

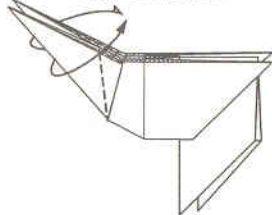


52

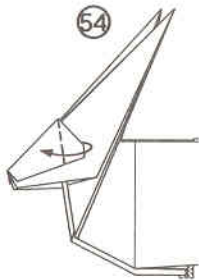


53

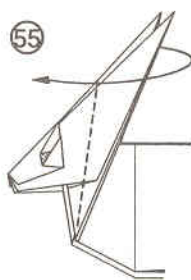
かぶせ折りをしながら
頭部を引き出す



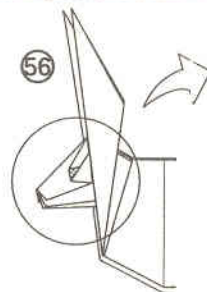
54



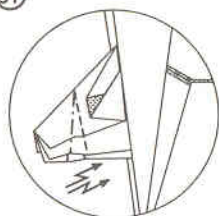
55



56

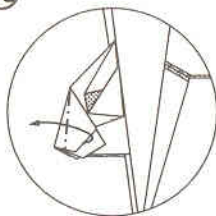


57

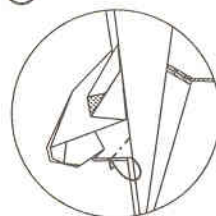


外側に段折り

58

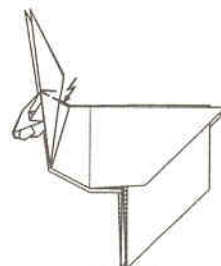


59



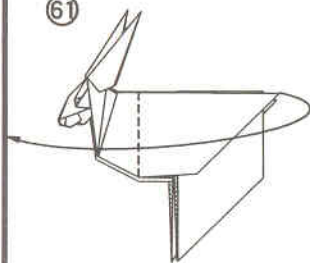
内側に折り込む

59

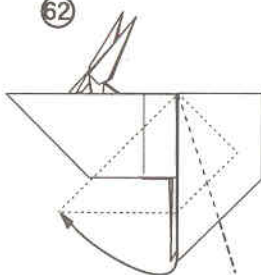


段折り

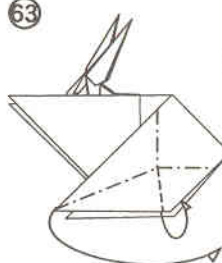
61



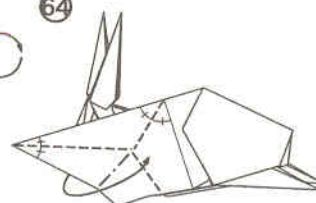
62



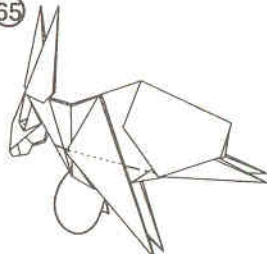
63



64

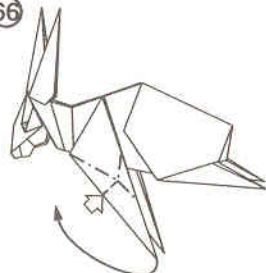


65

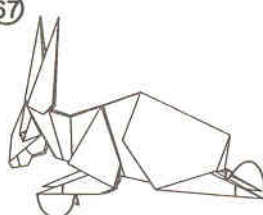


内側に折り込む

66

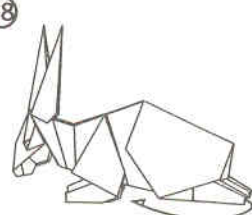


67



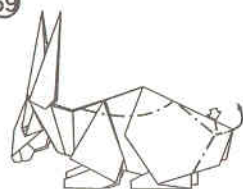
先端を折り込む

68

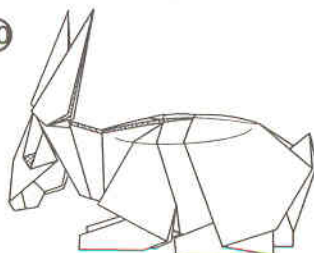


山折り

69

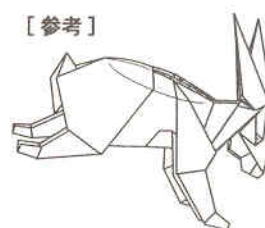


70



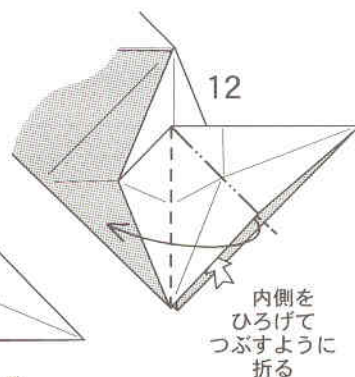
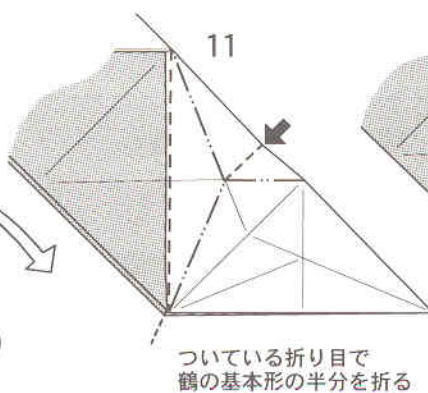
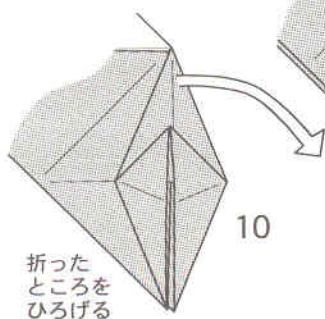
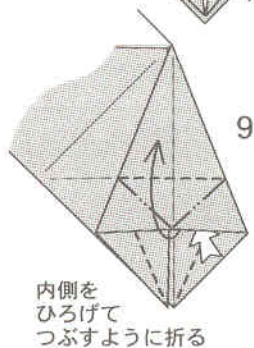
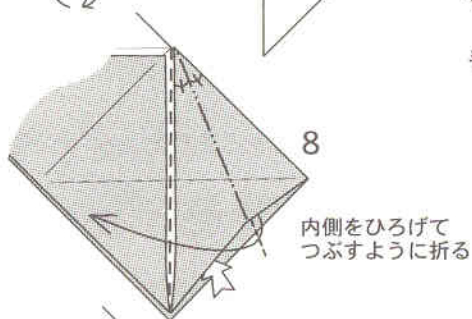
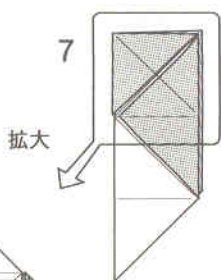
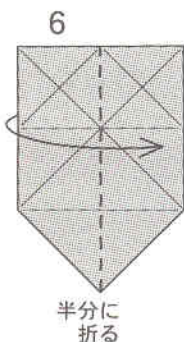
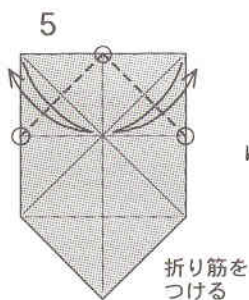
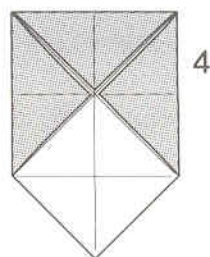
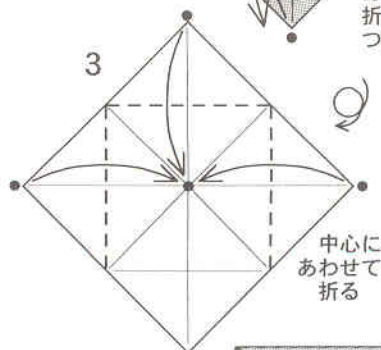
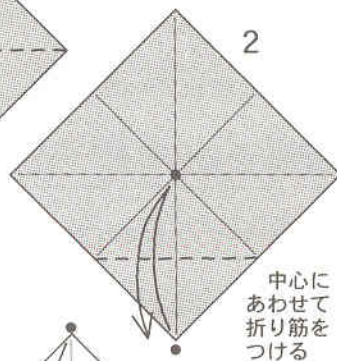
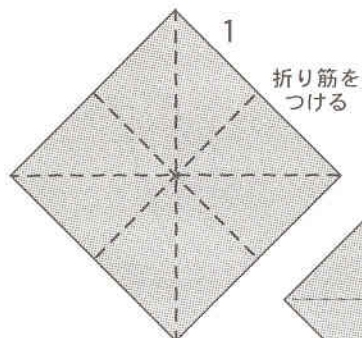
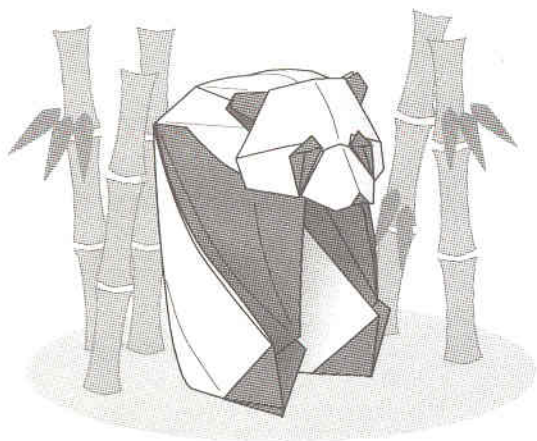
できあがり

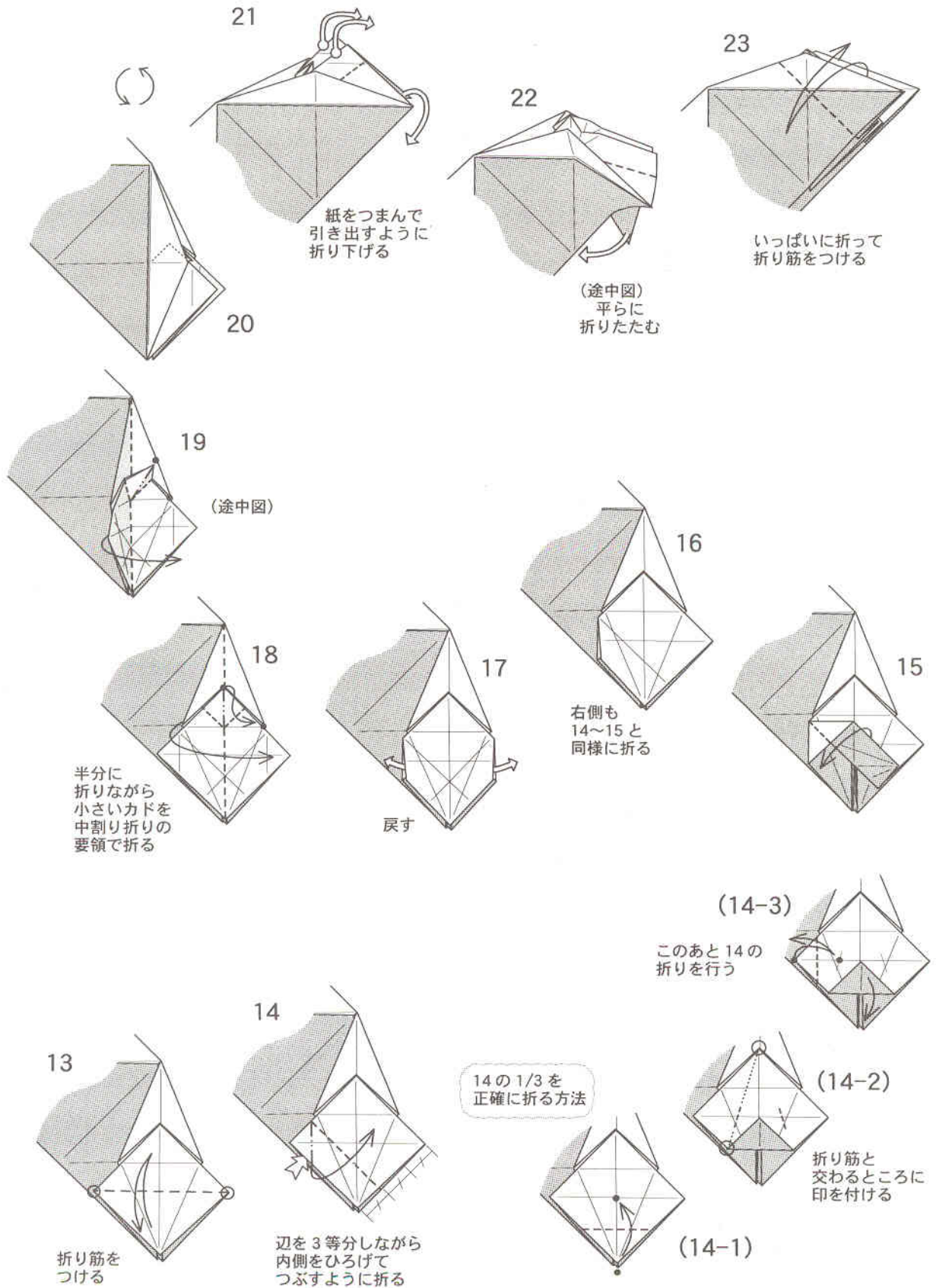
【参考】

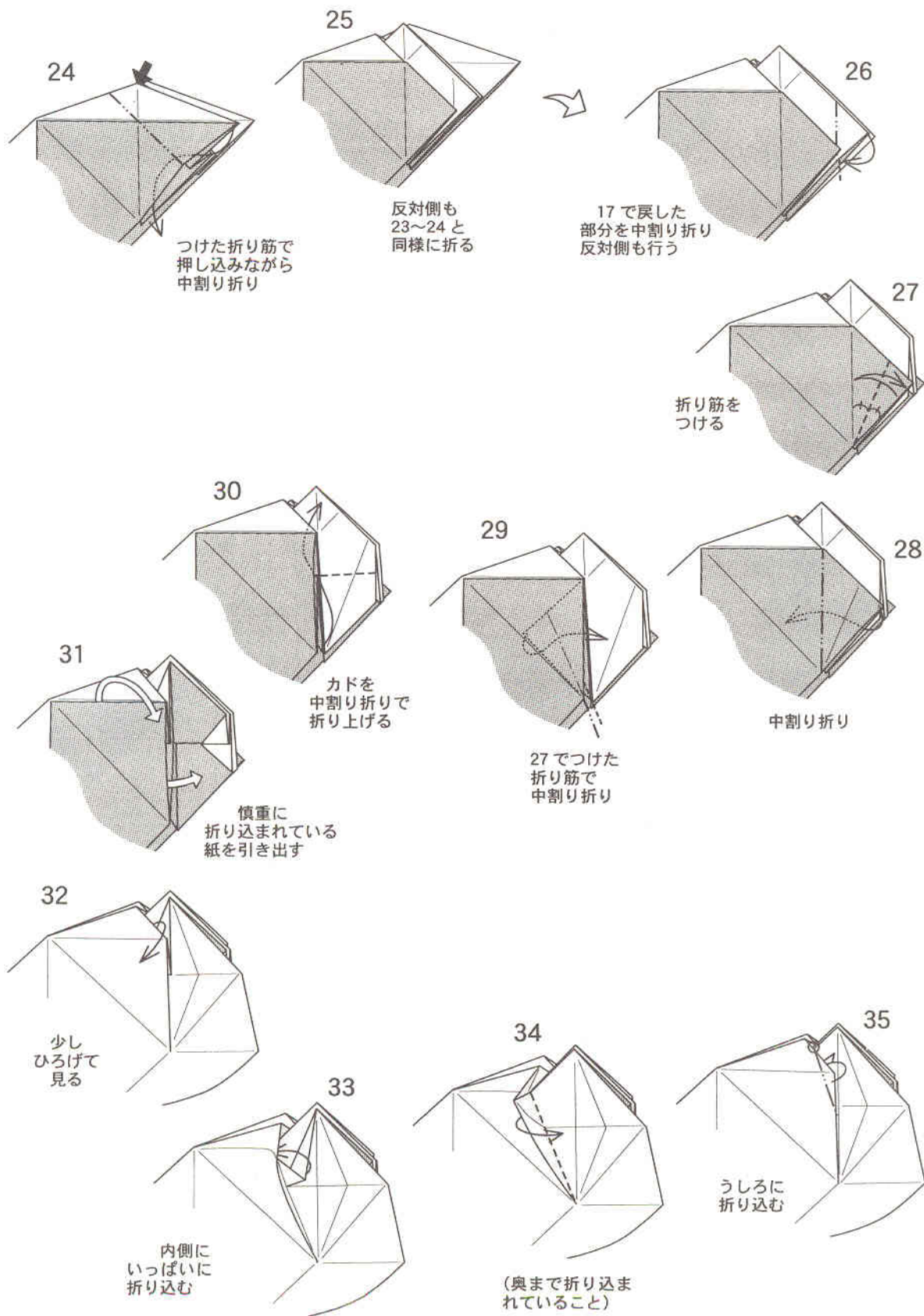


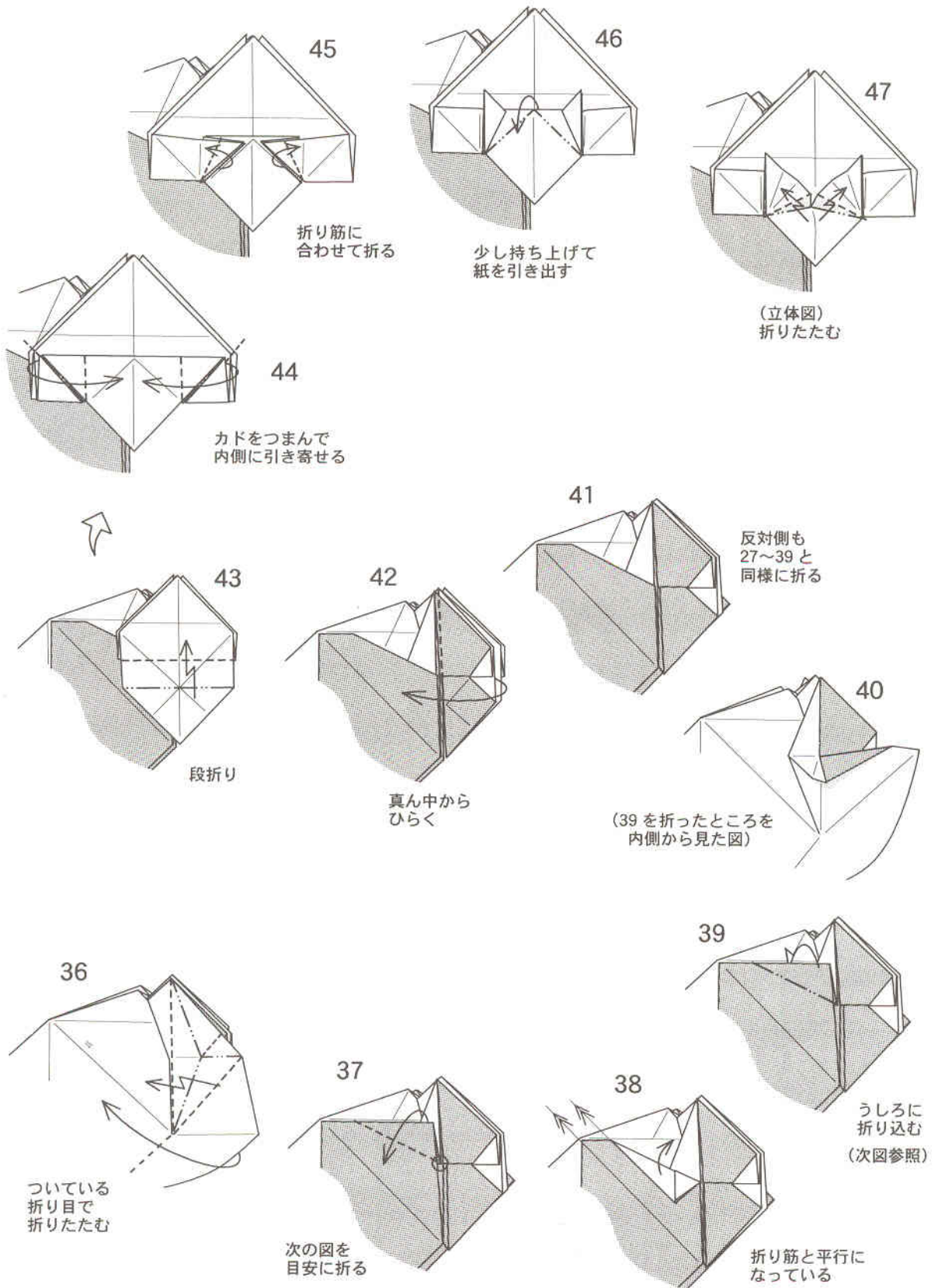
パンダ

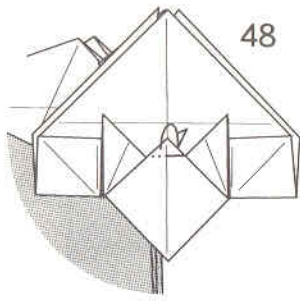
作／図 小松英夫



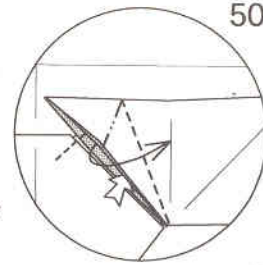
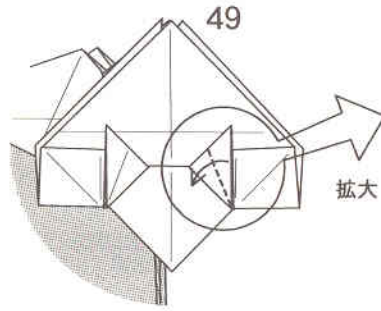




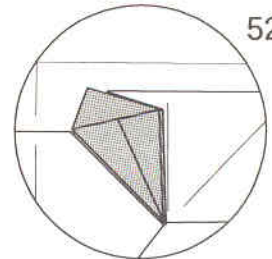
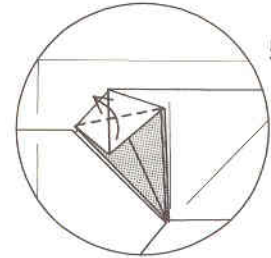




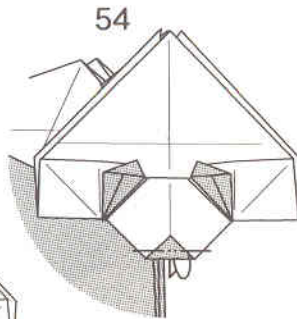
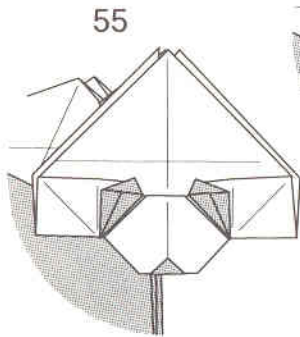
カドを
うしろに
折る



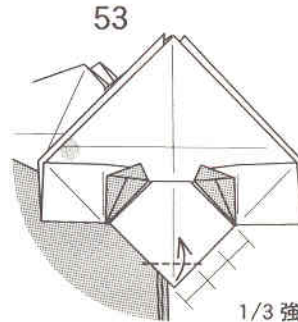
上から
2層めのところで
内側をひろげて
つぶすように折る



左側も 49~52 と
同様に折る

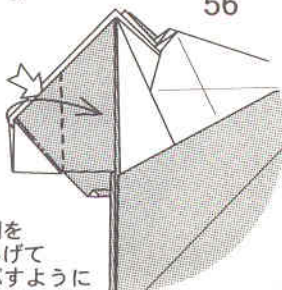


少し後ろに折る

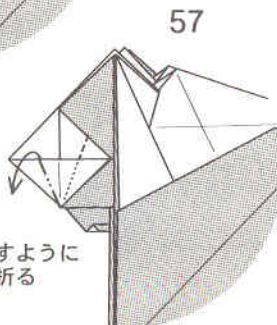


1/3 強で折る

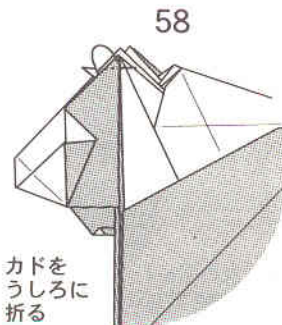
6



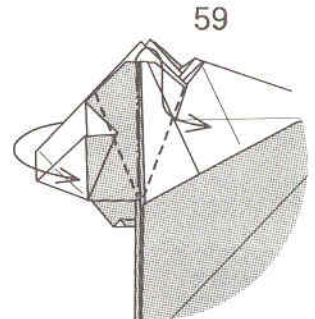
内側を
ひろげて
つぶすように
折る



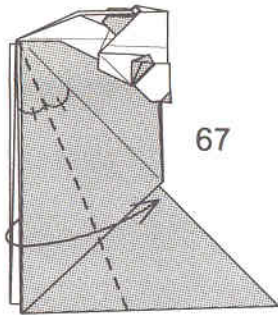
ずらすように
して折る



カドを
うしろに
折る

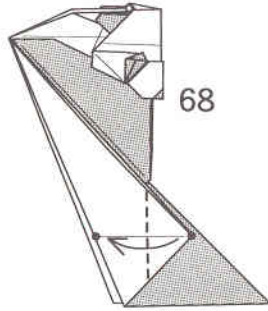


耳になるカドを
中割り折りの
要領で引き出す



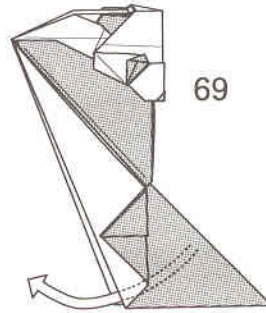
67

反対側も行う



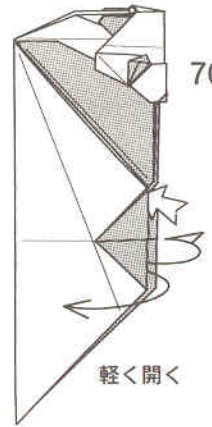
68

印を合わせて折る
反対側も行う



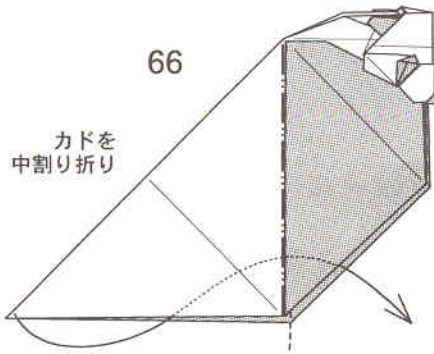
69

紙を引き出す



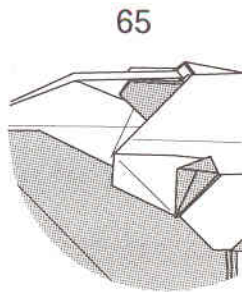
70

軽く開く

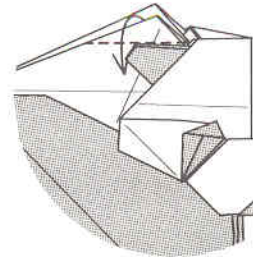


66

カドを
中割り折り

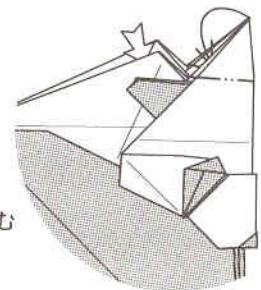


65



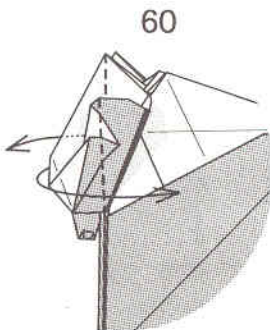
64

反対側も行う



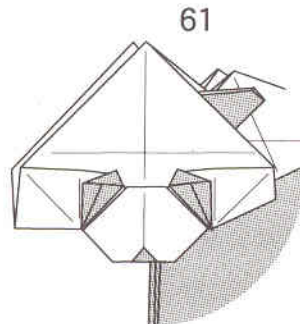
63

カドを
内側に
折り込む



60

(途中図)

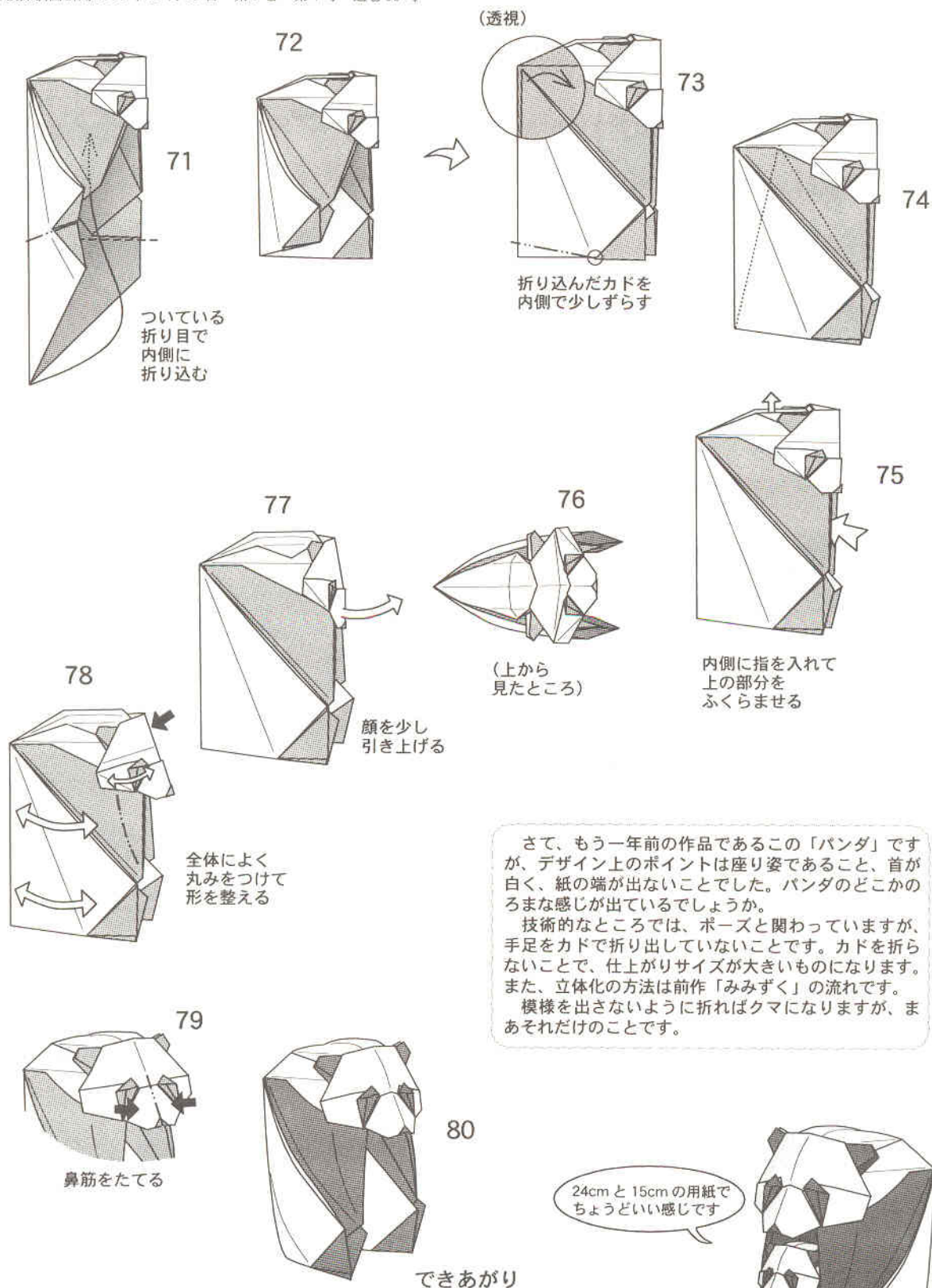


61



62

56~59 と
同様に折る



さて、もう一年前の作品であるこの「パンダ」ですが、デザイン上のポイントは座り姿であること、首が白く、紙の端が出ないことでした。パンダのどこかのろまな感じが出ているでしょうか。

技術的なところでは、ポーズと関わっていますが、手足をカドで折り出していないことです。カドを折らないことで、仕上がりサイズが大きいのになります。また、立体化の方法は前作「みみずく」の流れです。

模様を出さないように折ればクマになりますが、まあそれだけのことです。

"PANDA"

model designed by Hideo Komatsu November 1997
diagrams produced by H.K. November 1997

伝承の亀

地方版編集局

♡最近、折紙探偵団ホームページ団員自由掲示板で亀が話題になっています。仕掛け人は前川淳氏です。

▼(844)伝承の亀 by 前川淳

突然ですが、伝承の亀を知っていますか？工程は無理がなく、出来上がりは立体的、折鶴と並べてもぴったりと、何拍子も揃ったまぎれもない名作なのですが、あまり知られていません。書籍に掲載されているのを見たこともありません。わたしがどこで知ったのかというと、・・・実は、これも記憶がないのです。これは、本当に伝承作品なのでしょう？

♡この書き込みに対して投稿3件。

▼(845)かめを折る老人 by 京都の新北知り合いが名古屋で地下鉄に乗っているとき、隣に座っていた老人が黙々と折り紙を折っていきなり周囲のひとにできた作品をあげていたそうです。

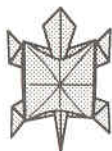
その作品が「伝承のかめ」と聞いていたのですが、簡単に折れて立体でかわいいということだったので、前川さんの伝承の亀はなぞの老人の伝承の亀とおなじものなのでしょうね・・・もしかしら「なぞの折り紙老人」というのが前川さんの変装した姿だったりして・・・ちなみに折り図は探偵団新聞に載らないのでしょうか？

▼(846)作者不詳の亀 by 米田正孝

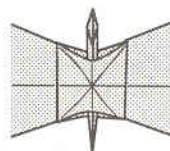
844の「伝承の亀」は、日本折紙協会発行の雑誌「おりがみ」209号(1993年1月1日発行)に掲載されています。亀の折り図は、愛知県の半田丈直さんのアイデアによる「鶴・亀の連結」の形で紹介されています。なお、作者は不詳とのことです。

▼(848)伝承の亀掲載書籍 by 進藤英次

写真から察するに(違ってたらすみません)、笠原先生の「最新・折り紙全書」所収の亀に見受けました。p188。笠原先生の話では、中国か韓国のものらしいとのことですが、ご本人も定かではない旨書いておられました。はて、この亀さん、どこの出身だろう？



伝承の亀？



亀鶴

♡こうして伝承亀の正体が少しずつ明らかになっていきます。

▼(852)伝承の亀の伝承 by 前川淳

自身、記憶がないのですが妻によると、「伝承の亀」のわたしと笠原さんへの「伝承」は、以下のような経過だったとのことです。数年前、妻の職場(公立児童館)に遊びに来ていた韓国の少女が折っていた亀を見た妻がわたしに伝えた。その後、わたしが笠原さんに折って見せたが、知らないという答えだった。経過はみごとに忘れているのに、折り方は覚えていたわけです。しかし、なんで忘れてるんだ？

♣受け狙いの前川健在。



▼(855)伝承亀の幾何学的考察 by 川崎敏和

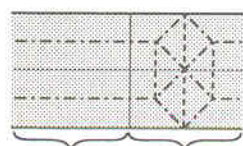
前川さんの写真を見て、ひょっとしたらと思い、伝承の亀を折ってみましたところ次の事がわかりました。

「足の折り出しの工程を飛ばした伝承の亀＝細長い帯(内接円を持つ二カ所開いた四辺形(左下図))による変形鶴」なお私はこの鶴を「亀鶴」と呼んでいました。

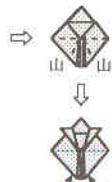
♡伝承亀の本質が変形鶴である事を理論を超えて感じ取っている前川氏の指摘「工程は無理がなく折鶴と並べてもぴったりと、何拍子も揃ったまぎれもない名作なのですが、あまり知られていません・・・」はさすがです。では京都の新北さんのリクエストにお答えし折り図を紹介しましょう。

欲張り折り図

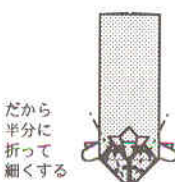
用紙:長方形、左半身:亀鶴、右半身:伝承亀



この長さは自由 こは正方形



尾になる 首になる



だから半分に折って細くする

中割り折り方で首と尾を作り翼を広げれば完成



左半身亀鶴、右半身伝承亀

折れる雲竜紙

佐世保

雲竜紙は透明感や紙繊維の美しさが魅力の和紙です。しかし腰の無さと漉き込まれた繊維の難さが折り紙には不向きです。柔らか過ぎて折り目が付きにくいなら糊をきかせてぱりっとさせればよい！繊維は柔らかくすればよい！折れる雲竜紙が完成しました。

モニター感想：花を上手に折ろうとして紙を手にするのですが、一度雲竜紙で折ると普通の紙を使う気がなくなりました。(N.S.さん) 連絡:折紙陶芸センター田島純雄。佐世保市木風町693-1(Tel 0956-22-1162)(編)

垣根

佐世保

ほとんどの団員にとって「探偵団＝新聞＋コンベンション」です。しかし情報の流れは新聞⇒団員で、逆向きは僅かです。投稿はNOAに、探偵団新聞は読むだけという人がたくさんいます。投稿意欲を削ぐ原因は何でしょう？質の高さ？遠慮？片寄り？探偵団を近寄り難い存在、活動の中心は垣根の向こうの別世界と感じている団員がいます。意思の疎通をはかりましょう。遠慮と嘘を取り払って本音で意見を述べましょう。団の活動を支える人々の努力がフルに生かされるように。(川崎敏和)

♡インターネット上では、今回紹介したようなやり取りが日常的に行われています。羽鳥さんは情報価値の高い、前川さんは受け狙い&多様な、京都の新北さんは想像豊かな、〇〇さんは自己満足の情報価値＝0の話題を提供しています。ネット上で喧嘩する無法者もいます。今後この方面が急速に発展することは間違いありません。環境整備は大変ですが、ぜひ参加を。♡亀鶴の詳しい解説は、巻物シリーズ第3段「鶴七変化 式」にあります。♡試験的に始めた地方版。団との接点＝新聞、という人の立場にこだわって書いたつもりですが、1年(6回)をもって一区切りとしたいと思います。(編)

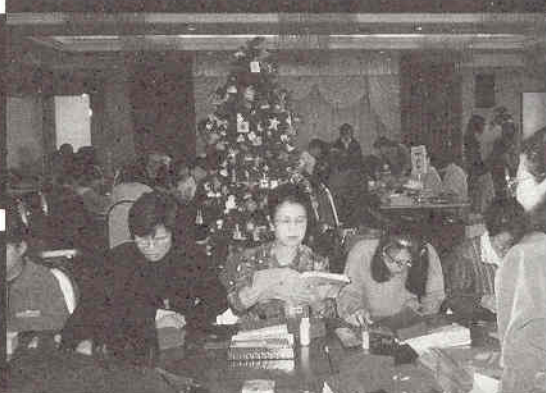


Rabbit Ear

つまみおり

初めての地方コンベンションも大成功 これから各地で展開できれば、折紙探偵団も生き延びられる 私のところでもやってみたいと思う方の連絡を待っています 私たちがお手伝いします

▲中心にクリスマスツリーが飾れた第1会場。六つに分かれて教室が開かれた。



大成功地方大会 静岡コンベンションに160名

地域密着型の静岡コンベンションが11月22～23日に静岡市で開かれた。大会1週間程前に、朝日新聞、静岡新聞に取り上げられ、当初予想していた参加者数を遙かに越え、急遽、教室を増設。また、会期中新聞4紙、NHKをはじめTV3局の取材もあった。この大盛況にスタッフも大喜び。すでに来年の話で盛り上がっていた。

探偵団の生き残りに地方大会の必要性を訴える山口真氏の呼びかけで、山田やす子(磐田市)、前島美恵子(磐田市)、浜田隆幸(浜松市・現おりがみはうす)の各氏が初めて会合を持ったのが3月。先の見えない「不安」な船出であった。それでも何度か会合を重ね、日時、場所、教育委員会後援の取りつけと進むうちに、新たなスタッフも加わり、自信のようなものまで芽生えはじめ、総力で大会の成功を願って全力を尽くした。配布用のチラシ、ポスター、案内書、マスコミ用の案内書の制作。参加者の受け付けなどはおりがみはうすが引き受けた。

参加者も東京周辺から西川誠司(探偵団代表)をはじめ、木村良寿、前川淳、北條高史、小松英夫、小笹径一氏等が

講師として参加。布施知子さんも講師として長野から応援に駆けつけてくれた。遠くからは、金沢の田中稔憲氏、名古屋からは神谷哲史君が講師を、さらに遠く九州からも田吹去水氏はじめ、探偵団の大ファンの中村一家など6名が参加。20名を越す県外者の参加があった。なお、県外からの参加者には静岡茶と登呂遺跡の埴輪のミニチュアがお土産としてプレゼントされた。

なお、最後にオークションが開かれた。前川淳氏、神谷哲史君などの作品が提供され、15,000円の売り上げで、全額吉野一生基金に寄付された。他にコーヒの売り上げ、中村家からの寄付などもあり総額38,095円が基金に。

以下スタッフの声(一部重複)

意外なお人からの年賀状で始まった

静岡コンベンションは意外なお人からの年賀状で始まった。「今年は静岡でコンベンションを開きたいと思っています。お手伝いよろしく 山口」お手伝いは喜んでさせていただきたい。しかし、このお人とこれからなんらかの接点を持ていくだろう事を考えると、恐ろしかった。

東京での第1回コンベンションに息子と参加した私の前にこのお方はヌーと現

れて「付き添いで来る親には自分の子供の事を折り紙の天才だと思っている人が多いからな」とのたもった。失礼この上なし。最低最悪なる第一印象。私の面の皮がもうちょっと薄ければ涙ものだった。この第一印象をぬぐいきれないまま、3月の中旬、開催8カ月前、第一回の会合が山口氏の静岡の自宅で始まった。その後全ての会合はここで行われた。メン

バーは山口氏以外3名のみ。しかもこの3名は開催地である静岡市内には居住していない。皆電車で1時間の距離を通って来る。おまけに、途中、主力メンバーの一人濱田君がおりがみはうすに就職してしまった。スタッフとなるメンバーが本当にほしかった。会場選びは、懇親会や宿泊をも可能な低料金の所にポイントがおかれた。静岡市内の施設のパンフレットが集められ、下見をも含めて、開催会場となった「たちばな会館」が選ばれた。開催4カ月前。不思議なもので、会場が決まったことで教室、懇親会、宿泊すべての打ち合わせが一カ所で済むと思うと勝ったような気がした。開催3ヶ月前になり、興津の山梨サークルの面々や、県内の探偵団員が加わりスタッフは8名程になった。実に言いたい放題の騒々しい会合ではあったが、少人数を意識してか皆自分のやる事は精一杯引き受けてくれる。チラシの文面作り、郵送、配布。報道機関への宣伝も始まった。開催2カ月前になると「静岡市教育委員会後援」が取れた。大きな後ろ盾を得たようで心強かった。それまでチラシ一枚配布するにも、県内では無名に近い「折紙探偵団」の名を出しただけでは通用しないからだ。「決して怪しい団体ではありません。」などと宣伝しなくてはならない事もあったからだ。広報活動のしやすさを得た事で何かもう一つ勝ったような気がした。開催1カ月前になると、講師の推薦や作品の選定、教室の人数、それにコンベンション全体に流れについて細かいところまで話し合われるようになった。この頃参加の申し込みはほとんど無し。せめて会場費だけでも支払うためには最低何人の参加があればよいのかなどと心細い話が出てくる。いよいよ開催まで1カ月になると、当日の役割分担も決まり、後は参加人数次第というところまでになった。チラシの効果も少しずつ出てきて参加者も集まりだし、何か楽しそうにやれそうないい感じのところになり思いもよらぬ事が

起こった。新聞2社が前後してコンベンションの記事を載せてくれた。3カ月も前からお願いしていたことを開催まで1週間に迫ってからかなえてくれた。当初の予定人数をはるかに超えた160名程の参加希望者が集まった。スタッフ一同運営の不安を抱えたが、それも乗り越えたら、皆笑っていた。笑っていなくては不安には勝てなかった。こうして迎えた開催当日。さすがに笑っている暇はなかったが、参加者の真剣に折紙を折る姿にこのコンベンションが開かれて本当に良かったと思った。静岡にもこんなに折紙の好きな人達がいたことに感心した。全くの手探り状態から、少数スタッフで、初めての地方版コンベンションが行われたという事実をつくりあげたことは大きな意味があったように思われる。この事実を足掛かりに静岡だけではなく他の地方でもこのようなコンベンションが行われることを期待したい。一步とは言わず半歩お先に開催させていただいた静岡の経験がなんらかの形で役に立つことがあれば嬉しく思う。こう思えるのも、ずっとスタッフを笑わせ続けてくれた山口氏の存在あってのこと。この8ヶ月で山口氏の貴重なお言葉に本当に笑えるようになった。私の面の皮もますます厚くなった。「静岡コンベンション」になんらかの形で関わって下さったすべての皆様にお礼を申し述べたい (山田やす子・磐田市)

イベント好きな私

探偵団の存在を友人に紹介され、メンバーになって5年余りが過ぎた今年2月頃、「静岡コンベンション」のスタッフとして参加することになった。元来イベント好きな私としては願ってもないことであったが、何をどうすればいいのやら…。元気な山田さんをはじめスタッフとの打ち合わせを重ね、チラシの配布、スタッフの確保、講師の手配などそれぞれが出来ることをしていくという方法で当日を迎えた。マスコミに取り上げられたこともあり、当初7～80人集まるかどうか心配した参加者数も、160人程になったことはうれしい誤算だった。人数が増えたことで、急遽、教室数を増やすことになっても、すぐに対応できる人材が揃っていたことに、改めて「折紙探偵団」という団体の層の厚さに感心したのは私だけだっただろうか。ともかく、大勢の人達に助けられ無事終了できたことに感謝しています。(前島美恵子・磐田市)

▶イベント好きの前島さん(左)の教室は今人気絶頂のマジックロースキューブが紹介された。



▶記念講演をやった北條氏(左)と布施さん(中)は北條氏のファンで地元の水井さん。



趣味のためなら 家族も泣かす

初物づくしの今大会、私もコンベンション初参加でいきなり初講師。しかも全体講演のすぐ後で、他の人の教室を参考に出来ない!なんてことだと思いつつ、14人を相手にしどろもどろながらも説明をし、1時間が過ぎた。やれやれなんとなかった。反応もまずまず。アンケートが怖いけど。

二日間で3時間の教室を終えて、疲れはしたが、自分にとってとても良い勉強になったと思う。成せば成る。何事も経験が大事。(単なる開き直りか?)スタッフでありながら、自分のことばかり気にしていて、会場での気配りが足りなかった。他の方々申し訳ありませんでした。来年は下働きに徹したいと思っています。

今回いちばん嬉しかったのは、探偵団の主要メンバーにお会いできたこと。来年は東京のコンベンションにも絶対参加するぞ、と息巻いている、自分の趣味のためには家族も泣かす、不良主婦なのであった。(鈴木美恵子・富士市)

子連れスタッフ

「子沢山」の山梨です。3月に(また)出産したので、赤ちゃんを連れてのスタッフ参加となりました。はじめにしたことは、とにかく折り紙関係の知人には片端から声をかけ、お手伝いをお願いしました。皆さんチラシ配りにスタッフにと、大きな戦力になりました。特にチラシ配りでは、知人に配っていただくようお願いしたものが大変功を奏したようでした。口コミの力はあなどれません。スタッフをやってみて一番の収穫は、スタッフの皆さんと仲良くなれたことです。来年のコンベンションが今から楽しみなぐらいです。最後に!当日は子供を沢山連れて行き、大変大変ご迷惑をおかけしてすみませんでした!子供なんて連れていくんじゃなかった、とも思いましたが、子供たちは皆満足そうで、折り紙の面白さに目覚めてくれたみたいです。それがせめてもの救いでした。で、み、「来年も出たい」って言っているけど、どうしたらいいのでしょうか……。 (山梨明子・清水市)

「趣味こそ人生」(仮題) 1月8日NHK教育TV

11月28日に行われた折紙探偵団定例会がNHK教育テレビに取材された。番組名は「趣味こそ人生」(仮題)。NHKの趣味のデータベースを開いて見せていくというもので、全国にある様々な趣味のサークルを取り上げるという内容。その中の一つとして探偵団が紹介されるとのこと。放映は1月8日(金)で夜7:30～10:00、



▲西川代表をはじめ、TVカメラに向かってポーズを取られる例会常連者。

生放送で番組中におりがみはうすからのTV電話での中継もあるそうだ。(出演予定者は西川誠司、北條高史、宮島登、小松英夫氏等)取材では、例会の行われている文京区民センターで、何人かの作家がそれぞれ自作品を紹介して折り紙の楽しさを語ったり、干支のウサギの競作を披露するようすなどが収録された。最後には西川団長を中心に「皆さんも一緒に折りましょう!」と唱和。探偵団は、いわゆる折り紙教室のようなサークルと比べると特殊な団体で、それゆえかそのイメージが正しく伝えられるのも難しいようである。とはいっても一人でも多くの人に探偵団の存在を知ってもらうことは意味があるし、地方の団員には例会の雰囲気やすこし分かるかも知れないので放送をお楽しみに。

おりすじ

私一偶然一折り紙

齊藤 隆

この原稿を書くにあたって私の折り紙歴を振り返ってみました。すると、1つのキーワードが浮かびました。それは「偶然」です。

そもそも折り紙好きとなるきっかけは、小学4年生の頃、図書館で何気なく折り紙の本(書名は忘れてしまいました)を借りたことでした。その後しばらく、本を借りてはひたすら折る日々が続きました。元々私は家の中で遊ぶ事が多かったので、正に折り紙は私にうってつけの遊びだったのでしょう。

しかし中学生の頃、その情熱が急速に冷めてしまう時期がありました。理由は今でも良く分からないのですが、おそらくは思春期特有の大人にあこがれる心が、折り紙を単なる子供の遊びとしか見なくなった為ではないか、と。まあ、強引な分析ですが。

そして再び折り紙に熱中するきっかけとなったのは、書店で偶然見かけた「ビバ! おりがみ」シリーズの

本でした。中を見ると、そのあまりにも複雑に折られた作品が次々と目に飛びこんで来て、これらを折ってみたいという衝動にかられ、財布の中身を確認するやいなや本をレジに持っていったのでした。

探偵団の存在を知ったのも偶然でした。大学の研究室のパソコンでインターネットを楽しんでいたとき、ふと折り紙に関するホームページは無いかと最初に見つけたのが探偵団のページだったのです。その翌年つまり今年、就職で東京在住になった事から探偵団の事を詳しく知ろうと思い、おりがみはうすに足を運び、そこで例会の事を知ったのです。例会では前川淳さん、山口真さんを多くの折り紙愛好家達にお目にかかれて大変感激いたしました。

いくつかの偶然の積み重ねが私と折り紙の関わりを深くしている。こう考えると、まるで運命的なつながりがあるような、不思議な気持ちになります。

- 折り紙に市民権を! - 国際折り紙アート コンクール

地方版で紹介したおりがみ陶芸センターと共同で国際的な折り紙コンクールを行います。目的は折り紙の市民権獲得です。センターが開発した「彩典紙」という和紙があります。この紙で折ったバラからは命が感じられました。これなら趣味域を越えて芸術や工芸のように社会に浸透するに違いない! と思いました。世界中の人に彩典紙や陶芸紙で作品を折ってもらい、きちんとした展示会をやれば、折り紙の市民権獲得に貢献できることでしょう。

総額100万円の賞金を用意いたしました。審査委員は笠原邦彦氏、布施知子氏、デビット・ブリル氏、山本桃紋子氏と川崎です。問い合わせは川崎敏和(〒857-1193 長崎県佐世保市沖新町1-1 佐世保高専 TEL/FAX 0956-34-8443)まで。

新刊書紹介

「バラと折り紙と数学と」 川崎敏和・著 A-4変形 定価(本体2800円+税) 森北出版・刊

先日、バラの川崎さんの「バラと折り紙と数学と」が発売になりました。内容は、ブロック、バラ、折り紙の幾何学の三部構成です。ところどころに大量生産のコツや問題と答えが書かれていたりして、折り紙の本としても、不思議な数学の本としても楽しめます。本屋さんでは「数学」の棚に置いてありました。一見難しそうですが、説明がとても親切なので、取り組みやすいです。川崎さんの心づかいが伝わってきました。内容はもちろんですが、表紙と帯もカッコいいです。(島村)

定価 300 円

発行・折り紙探偵団

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす内

Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司

編集人・山口 真、岡村昌夫

★漫画は作者の都合でお休みします。

TVチャンピオン 第3回折紙王選手権出場希望者募集

数々の名勝負をくりひろげ、見てる者を楽しませてくれたTVチャンピオン折紙王選手権。しばらく遠ざかっていたが、約2年半ぶりに復活。歴代チャンピオンの西川誠司氏、北條高史氏を迎え(予定)、選手権を争奪する出場者を募集している。

折り紙の持つイメージからかけ離れたハードな戦いで、非常に忍耐力のいる勝負。折紙だけでなく体力に自信のある人の挑戦を待っている。

第1回チャンピオンは現折紙探偵団代表の西川氏。婚約時代でパワーのあるときだった。第2回のチャンピオンは、今売り出し中の若手有望株で、将来はこの人といわれている北條氏。白熱した戦いが繰り広げられることは間違いないが、どんな戦いが展開されるか今から楽しみだ。

時間的な制約もあるので、出場希望者は至急連絡を。録画撮りは1999年1月9日、10日の2日間が予定されている。

連絡先はおりがみはうす=山口まで。

なお、優勝賞金は50万円。2月18日。TV東京系で放映される予定。

折紙探偵団定例会の

お知らせ

★■文京区民センター ●12月は忘年会(12月19日、区民センター)のため例会はありません。●1月30日(土)2時から。例会での講習会は山田勝久氏です。

ホームページ公開中

公開URLは、

<http://www.ask.or.jp/origami/v/>です。団員パスワードは、大文字/小文字区別して、Pyramidです。

おりがみはうす

ホームページ公開中

公開URLは、

<http://www.remus.dti.ne.jp/origami/h/>